

2025年度鳴門市人権地域フォーラム(後半記録)

テーマ 「ひとごと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

日時:2025年8月22日(金)13:30～16:30

会場:鳴門市役所 2階大会議室

コーディネーター M(T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表)

パネリスト Y(人権を語り合う中学生交流集会運営委員会事務局)

N(1996年度I中卒業生・T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー)

H(1996年度I中卒業生・徳島県教育委員会人権教育課指導主事)

【前半3から】

《コーディネーター M》

それでは、そろそろ再開したいと思います。皆さん、I中学校のメンバーがそろって、非常に恐縮なんですけど、Y中学校の話もしましたが、T中学校もS中学校も、県外からも来てくれています。

どこの学校でも、自分の言葉で自分の本当のことが言える。それは小学校も高校も一緒だと思うんです。いろんなものを背負って生きているし、切ない思いもいっぱいあるし、学校って我慢する場所じゃなくて、職場もそうです。しんどいことがしんどいと言えるし、辛い抱え込んでいることを、抱え込んで追い込まれていくのではなくて、それを生き生きと表現して、関係ができて繋がりができて、「ああ、人生って捨てたものと違うな。私は私で良かったな」と思える語りができたらと思うんです。

私は、2019年に、Y先生が「T-over人権教育研究所・人権こども塾」というものを立ち上げて、最初は、一生懸命応援はするけれど、こんなことができるんだろうかと思ったんです。一泊研修の話でも、予算も何もないのに本当にこんなことができるんだろうかと思ったんですが、やっぱりできるんですね。

今年の一泊研修の夕食は、バーベキューをしたんですけど、かつてY先生が、学習会でお世話になった肉屋さんから肉を購入したんですけど、お願いした肉よりもはるかにいい肉を食べさせていただいて、こんなに美味しい肉が食べられるのかという経験を、この夏の一泊研修でしたんです。

(じっくりと、力強く) その夜です。いろんな思いを背負って、教師も子どもたちも生きているわけです。言わなくてもいいことです。でも、そのことを語った瞬間に、集まったみんなの関係がぐっと近づいていくし、世界が変わっていくんです。語りが語りを生んでいくというのは、そこにあると思うんです。

なぜ人権学習をするのか。なぜ語り合いの学習なのか。30年前です。30年前の子どものことを、中学生のことを、よその中学校の子どもに語って、その学校の子どもたちが感動して、力をもらって、担任の先生が思いが溢れて自分のことをさらけ出すようになるんです。やっぱり人権学習の醍醐味は語りにあるんです。

昨年、長島愛生園に行った時に、バスの中でマイクをずっと回していったんです。永遠とマイクが回っていくんですね。最後、後10分くらいで着くという時に、リーダーとして活躍してくれる高校生に、後10分でまとめてくれと言った時に、10分できちんとまとめるんです。そんな高校生がいるんです。そんな高校生になっていくんです。

最初に話をしていただくんですけど、実は、2024年度人権こども塾の開講式の時に、H中学校で、同和問題とかそんなに勉強してないです。そういう中学生が人権こども塾に参加して、「I町出身、部落出身のお母さんが結婚の時に本当にしんど

かった。その時にお父さんは、部落出身のお母さんを選ぶか、お父さんの自分の親を選ぶか二択を突きつけられた。」

サラッと言うんです。

「その時に、お父さんはお母さんを選んでくれた。だから、私はここにいます。お父さんに心から感謝しています。」

こう語るんです。それが「人権こども塾」なんです。そんな発言をするわけないです。

これは、さっきN君が言ってくれていたように、N君に「同和問題があると思うか」と問うた時に、自分が部落出身であることを言いにくいですからね。なかなか言えませんよ。簡単に、職場でいろんなところでサラッと言えたら、気楽に言えたら、何の抵抗もなく言えたら、本当に問題を変えてきた大きな一歩になると思います。「きれいごと」は並べるけど、本当に自分をさらけ出すことはいない。本当のことが言える関係になっていかなければいけないんです。

私は66歳です。昨日も登校日の子どもたちに、「私にはあまり時間がないんだ。みんなと本当はもっともっとやりたいし、できたらI中学校に10年いたように、Y中学校で10年居させてくれたらと思うけど、そんなことも夢みたいなことだ。でも、今年Y中学校に来れた。それが私の中にずっと諦めていたY中学校へのマグマが沸き起こっているんだ」という話をしました。

やっぱり自分を語るということです。親子でも語るということです。そういうことが語れる場があるということです。(いっぱい笑顔で)バスの中で、お母さんがその自分の結婚の時のことを語ってくれて、長島愛生園で夜、親子で語った話というのは忘れません。では、話をしてもらいます。マイクをお願いします。

《1993年度I中学校卒業生 H》

はじめまして、Hと言います。

私もI中学校出身で、NさんやHさんやTさんのちょっと3年くらい上の先輩なので、一緒の時代ではないんですけど、M先生とY先生に中学校の時に世話になりました。

(一生懸命言葉を探そうに、ゆっくりと)私は、中学校の時はどちらかというと、積極的に発言できるタイプではなくて、自分の中でみんなが言った言葉を自分に問いかけをするタイプだったんですけど…。

それでも、さっきNさんとかHさんの話を聞いて、まったく同じ思いだったなど、全体学習を中学校の時に体験できたことは、私の人生に大きく影響しているんだなあって、今すごく実感してます。

私は、結構どんくさいというか、鈍かったので、小学校の時に学習会に行っている意味(参加している子は部落の子であることを)、その時に多分教えてくれているんだろうけど、わからなくて…。

中学校に入って、全体学習の中で、「あれ？ そうなのかな。私って部落の生まれなのかなあ？」っていうのに気づいたんですけど、その時には、もう、先生たちからぶつけてくれた熱い思いとか、部落差別についての正しい知識を学んでいたことで、いつも前向きな気持ちで、自分を全然卑下する気持ちもなく、すごく自分に自信を持たせてくれた環境だったんです。

それで、実際(部落差別を)体験することがないまま社会人になって「あれっ？」と思うことはあったんですけど、「あそこでは事故せられんでよ」とか、そういうの(部落に対する差別的な発言)を初めてI町から出て聞いて、びっくりすることもあったんですけど、特に自分に大きく影響するような差別を受けることはないままでした。

その後、高校の時に出会った主人と、お付き合いをすることになって、いざ結婚ってなった時に、私はサラッと、「私は部落の出身なんやけどな」と伝えました。主人は市内の方の生まれだったので、人権学習は全く、全くというか、(ある程度は)したのかもしれないけど、そんなに身近な問題ではなかったんです。

主人は、「えっ？」っていう感じだったんですけど、それを家族に話した時に、お父さんが大反対だったんです。(一言一言を、自分の中で確認し噛みしめるように)私は、結婚差別は部落に対しては世間体を気にして反対するとか、それまではそういうイメージだったんですけど、主人のお父さんは、部落の人に対して、ものすごい嫌悪感というか、許せない絶対に認めないという強い意志がありました。

(あふれる思いを懸命にこらえながら、言葉を絞り出すように)お父さんと会うこともできなくなった時に、私もどうアプローチしていいかわからなくて。だからその時に、主人はすごく悩んだと思うんです。お父さんから縁を切ると言われた時に、ずっと、考えて考えて考えて、考えて過ぎて過呼吸になって、倒れた時もありました。

それでも、私と一緒に生きていくという道を選んでくれて…。

すみません、(照れくさそうに)話が長くなってしまうんですけど。

その時に、家族はお父さん以外、親戚の方も、お母さんも、おばあさんも、みんな2人を祝福してくれたんです。なので、私はすごいお父さんのそういう態度は悲しかったんですけど、他の親族の方はみんな味方になって2人が一緒になることを祝福してくれたので、それがとても心強く嬉しくてありがたい気持ちの方が強かったです。

私が幸せになることと、主人を絶対に幸せにすることが、いつか、いつか何か接点があった時に、お父さんとわかり合える唯一の方法かもしれないと思って、絶対に幸せになるって思って結婚生活をして。

そして、娘が生まれて、H町に引っ越して来て、娘が中学生になり、H中学校に行った時に、たまたまY先生と再会することができて、本当にびっくりしたんですけど、今まで忘れていたことが一瞬によみがえって、これは縁があるんだなと思って。

娘もそれで「(人権)こども塾」に入るきっかけになったんですけど。娘は生まれてからこれまで、私の実家に行き、私の両親には、度々会っているんですが、主人の方の実家へは一度も行ったことがなくて、お母さんは家の方に来てくれて、会ったことはあるんですけど、おじいちゃんには会ったことがなくて。

もしかしたら、(娘が)本当に小さい時は「おじいちゃん？」って聞かれたかもしれないんですけど、段々大きくなってきて、娘なりに「なんかおかしいな」と多分思っていたと思うんです。でも、聞いたらいかんことなのかなと思ってたかもしれないです。

(言葉を探しながら、精いっぱいの思いを込めて)なので、どう言ったらいいのかな。私の想いとしては、娘にとっておじいちゃんが悪者になってほしくなくて。私は、おじいちゃんに傷つけられてるわけではない。

お父さん自身が、きっと多分、今一番辛い立場というか、いつかこの呪縛を解いてあげられたらと思うんです。ちょっとその方法はわからないんですけど。

Y先生が「平行線で手をつなぐ」と言われたんですけど…。「ああ、そうか」と思って…。私はずっとできずにきたんですけどね。会ってもらうことも難しいので…。けど、そういう感じで何かできたらいいなって、何となくですが、目から鱗だったというか。

平行線なのかもしれないけど、お父さんと今の形のないなかで何か、私たち夫婦、娘でもいいし、歩み寄りたいなって。

もし一緒に、歩み寄れる未来が近づいた時、お父さんがいられる場所をつくっておきたいなっていう気持ちがあります。

ただ、主人は普段人権の話もしないし、人権問題とかに興味がないというか、でも、この前、お酒も入っていろいろ話しているうちに、やっぱりあるんだと思うんです。実の父に対しての思いが…。

「我が子と縁切るぐらい部落の人と結婚されるんが、嫌だったんなら、何で最初からそういう教育をせんかったんだ、なんで今さらになって急にそんなことを言いだすんな」って、涙を浮かべながら吐き出すように話してくれました。

主人は主人で苦しんでいることを痛感しました。主人の気持ちも…、いつか、簡単じゃないけど、楽になれたらなあと思ってます。すみません、まとまりのない話で…。ありがとうございました。

《コーディネーター M》

一泊研修のバスの中で語ってくれた言葉が、ずっと私の背中を押し続けてくれています。(一言一言をゆつくりと、思いを返すように)やっぱり現実はいらないし苦しいし、なかなか言葉にできなくて噛みしめることばかりですが、でも、歩き続けていく中で何か生まれていくんだと思います。本当に堂々巡りで言葉も出ないようなやり取りをずっとしていきんですが、(力を込めて)どこかで何か引っかかって、何かプラスになって人間って変わっていくんだと思うんです。

Y先生の報告の中で、T中学校に私のクラスを連れて行って、T中学校の真ん中で授業をした場面の話をちらっとしてくれましたけど、部落問題を自分のこととして語っていく、当時は、I中学校3年A組というクラスでした。

3年A組の授業を見たT中学校の生徒会長が、公開授業で部落問題をひたむきに語り合ったI中学校の生徒たちに対して、ここまでズケズケ言うのかという思いを返してきました。T中学校の生徒会長の言葉です。

「I中学校のみんなは凄いなと思うけど、部落問題の勉強は大人がしたらええことやと思う。差別は大人がしよるんだから、子どもがやったってたいしたことにならんし、子どもは勉強せなあかんだろう。人権の勉強は大人に任せとったらええんや。僕らは、しっかり学校の5教科の勉強をしたらええんや。」

I中学校の生徒たちにとって、自分たちが一生懸命していることを否定する言葉は衝撃でした。私は、すかさずI中学校の生徒たちに意見を求めました。その時返した生徒の言葉に、リーダー格の男子生徒が、T中学校の生徒会長の言葉を受け止めて返すんです。

「部落問題、部落問題と抱え込んだらやっぱりしんどいよな。それはやっぱり大人が差別しよるから、そんな気持ちもあるよ。」

この発言で、Eに中学校の体育館の雰囲気が和んでいきます。受け止めて受け止めて返す、受け止めて受け止めて返す。そんな語り合いが続いていきます。そんな言葉のやり取りから、T中学校の体育館の中の空気がだんだん変わっていくんです。

やっぱり語り合いの醍醐味がここにあるんだと思うんです。先日「徳島県人権教育研究協議会の夏期講座」で話をさせてもらいました。その中で、1999年5月3日に読売テレビが制作したNNNDキュメント99「部落差別は今」～架からぬ橋～で、I中学校の全体学習が放送されました。

(当時に思いを馳せながら) その全体学習のテーマは「結婚差別」でした。その授業の後半、本当に純粋な生徒が「結婚差別で親が良くない行為をしているって言うけど、親が心配してくれたり、考えてくれたりしてくれた行為なので、それを考えるとやっぱり自分が間違ってもいいし、親が間違ってもいいので、どうしたらいいのかなと思います。」と語ったんです。

その語りに部落の生徒が、溢れる感情を抑えるように、丁寧な言葉で「あなたは、親が心配してくれているって言うけれど、親から間違った差別行為を教えられているということにもなりませんか?」と思い伝えると、その生徒は、「確かに良くない行為なんだけど、部落差別もなくしていこうと思うんだけど、なかなかうまくいかないと思います。」と語りました。

堂々巡りの語り合い、まさしく平行線です。でも子どもたちは純粋に思いを出し合います。この語り合いにこそ意味があるんだと思うんです。この語り合いの最後の発言、「ここで私たちがその意識を断ち切っていかなければ、結婚差別はずっと続くだろうし、ずっと幸せになれないと思う。そこにこの勉強をする意味があると思います。迷いとかもあるかもしれないけど、私たちが考えて語り合って、この差別をなくしていかなければならないと思います。」という語りは、学年全員の心に刺さっていきます。

結婚差別の問題は、生徒一人一人が「わがこと」として語り合っていくことが問われていきます。結婚の問題は利害が絡んだら、まだまだ差別意識が吹き出る現実があります。「3割の壁」という報告を聞いたことがあります。7割くらいの人は何の抵抗もなく結婚しているけど、3割近くの人はまだまだ部落出身者との結婚へのこだわりがあるという報告があります。

(思いが溢れ力がこもる語りが続く) これは、場所によっても違おうだろうけど、私はY中学校に帰って一番に蘇ってきたのは、学年180人の同級生がいて、半部分が部落の仲間だったこと。それは、当時同和対象地区学習会があったから、半部分が部落の仲間だとわかるわけです。でも、高校に行ったら1人になるんです。周辺の中学校には地区の子はいないし、いたとしても少数です。

高校時代、3年間、40人のクラスの中で、ただ一人、同和対策の奨学金を受給していたこと、その手続きに、担当の先生に呼び出されたとき、自分の中に沸き起こった卑屈さは、今も心に残っています。

そして、自分のクラスには、同和地区の生徒はいないという雰囲気の中で、同和教育のLHR(ロングホームルーム)があったとき、同和問題についてわかったようなことをいう同級生の言葉に心がえぐられた思い出があります。

中学・高校時代、部落出身の人間として、同級生が語る結婚差別に関わる発言にはいつも敏感であったことを思い出します。その中で今も鮮やかに蘇るのが、Y中学校時代、すごく優秀な、みんなが憧れ、みんなから尊敬されていた女の子が、同和問題についての学習の中で、「私は親が反対する結婚は考えられません」と語った言葉です。こんな子も部落差別をするのかと思ったことが心に刻まれています。

部落差別の現実、結婚差別までいかないところに厳しさがあると思います。祖父母や父母が反対するから、地区の子と付き合わないし、関わらない。恋愛感情を絶対に持たない。地区の子とわかったら差し障りがないように交際をやめる。

結婚差別というのは、本人に結婚の意思があるのに、親が反対するから起こる差別です。しかし、本人に、部落の人との結婚は絶対に無理という気持ちがあったら、結婚差別までいきません。

私の中学時代の同級生を見ても、地区外同士の友だちは結婚をしています。地区と地区外の結婚はほとんどありません。やっぱりこれが、部落差別の現実です。結婚がゴールではないけど、今語ってもらったように、抱え込むのではなくて、やっぱり

おかしいんじゃないかと、なぜこんなことにこだわるのかと、どうしてそうなのかということを問い続けていくことが問われていくんだと思います。やっぱり、「わがこと」です。自分はどうなのかということが問われているんだと思います。

会場の皆さんの意見、皆さんの思いつないでください。

《鳥取県倉吉市たんぼぼの会代表 S》

(前列から参観者に向かって)すみません。鳥取から来させていただきました。今のお母さんのお話を聞いて思うんですけど、私は人権教育に関わり出して30何年になります。「地区外だからこそ伝えなければならないこと」というのを自分の中の芯としながら続けています。

(切々と)このフォーラムに来させていただくようになってから、こういう場でいくら偉そうに言えても、自分の地元、自分の職場で何かがあった時でも、それに返せなければ学んだことの意味がないなあということを、2回ほど実感しました。

このフォーラムに参加して帰った日の夜、夜勤に出て職場の中での仲間外しを知った時、このフォーラムでもらった力をここで返さなければ、それこそ仲間が変わってもらったりしながらフォーラムに行った意味がないと思って、上司にこういう嫌な思いをしたということを伝えられて、職場の中に一石を投じることができました。

それからまた、何年か経った後にもちよつと職場で嫌な思いをしましたけれども、今は看護師をして同じ職場で53年続けています。48年経ったくらいの時に、自分の看護師としての人生史をつくりました。この嫌だったことも全部含めた形で本をつくり、事務長、看護師長、いろいろな同僚たちとか、みんなに読んでもらいました。こういう現実もあったんだということを仲間にも知ってもらいたい。そういう身近なところで自分のいろんな思いを発信できてこそ、人権教育を30数年やってきた意味があるんだなあということを感じます。

(一言一言を力強く)今、私たちいろんなところで「時間がない。予算がない。何もなし。ノウハウがない。」ない、ない、ないで、いろんなことができないと言います。私はそんなことはないと思います。私たちは、今年の4月に「諦めたところからは何も始まらない ゼロからの挑戦」という命題を掲げて、講演会を開きました。

これまでやったことのなかった「名義後援」の書類をつくったり、直に書類を持って行って思いを伝えたり、ほぼ無理だろうと言われた会場費の減免申請も了承してもらうことができたりして、本当に10人ほどの会員の手出しという形での少ない予算の中で、1800枚のチラシをいろんなところに配らせてもらった講演会を実施しました。

参加者は少なかったけど、来てくれた人が喜んでくれた。それに、何もできない、できないという中で、こういうことが実践できたということが、私たち、たんぼぼの会として25年活動が続いていますけれど、その中で、この25周年の記念講演会をしたというのは、自分たちの中でも大きな宝として残っていくものだろうなと思っています。

この25年の中で、亡くなった者、病気を抱えた者などいろんな仲間がいますけれど、今まで培ってきたいろんなノウハウを、自分ができなくても周りの誰かに伝えていこう。こういうことだったらできるんじゃないかという応援はしていこう。そういう思いで今活動を続けています。以上です。ありがとうございました。(拍手)

【後半2へ続く】